

石心会グループ

社会医療法人財団 石心会

医療法人社団 東京石心会

医療法人社団 新東京石心会

社会福祉法人 石心福祉会

http://www.sekishinkai.or.jp

海燕

うみ

つばめ

石心会 BULLETIN 隔月刊

発行人：石井暎禧

編集人：辻田征男

発行：石心会法人事務局

〒212-0014 川崎市幸区大宮町 23 番地 5

コーラルビル

TEL 044-511-2266 (代) FAX 044-540-1135

新院長の抱負

『トップガン』は1986年に制作されたトム・クルーズ主演の空軍パイロットの物語で、世界的に大ヒットした映画です。そもそも“Top Gun”とは、アメリカ空軍士官学校の最優秀卒業生のことで、転じて、ある分野・社会のトップクラスの人を指す言葉となっています。

川崎大動脈センター（KAC）では、毎年タイからの心臓血管外科医の留学生を受け入れています。その中の一人が留学を終えて帰国する前に

「KACはトップガンですね」

と、言ったことがありました。「あっ、そうなんだ、僕はTop Gunと見られているんだ……」と、気がつきました。

病院は医師から始まる

僕が川崎に来た2003年は、もちろん今の病院はなく、J R川崎駅西口から徒歩15分の川崎市幸区都町にあった築30年の古ぼけた旧川崎幸病院でした。現在の第二幸クリニックの前身です。

最初に会ったのは石井暎禧理事長・辻田征男事務局長・小林和彦事務部長の3人でした。その時のことは今でもはっきりと覚えています。3

山本晋
川崎幸病院院長

川崎幸病院は トップガンを目指す

人を前にして、

「日本一の大動脈センターを作りたい、必ず日本一になるから思い切りやらせて欲しい」

と、言いました。

当時、日本の大動脈医療はまだ黎明期でした。ごく一部に手術のできる医者もいましたが、大学病院ですら高い死亡率と多くの合併症で混沌としていました。

川崎幸病院に来るまでの4年間は、大学で大動脈外科をやって来ました。すでに「何が足りないか、何が必要なのか、大動脈外科をやる施設（大動脈センター）はどうあるべきか」など、はっきりとした自分のビジョンがありました。ただ、なかったのはそれを実現させる舞台でした。

大げさにいえば、僕は日本の大動脈医療の活路を川崎幸病院に求めたわけです。あれから15年が経ち、手術実績では国内に並ぶものはない大動脈センターとなりました

た（註；症例数のグラフ）。さて、

なぜ川崎大動脈センター（KAC）は日本一となったのでしょうか。僕は3つの必須要素を考えます。



海燕 79号 目次

新院長の抱負

川崎幸病院はトップガンを目指す	1
楽しく、美味しく、そして激しく！	3
内視鏡学会	5

症例検討会	5
院内急変	7
学会発表一覧	10
人事ニュース	18

- 1: 志 (ビジョン) を持ったリーダーの存在<医師>
- 2: それに賛同し、同じものを目指してくれる仲間
 <病院職員>
- 3: そのactivityを受け入れられる舞台<病院組織>

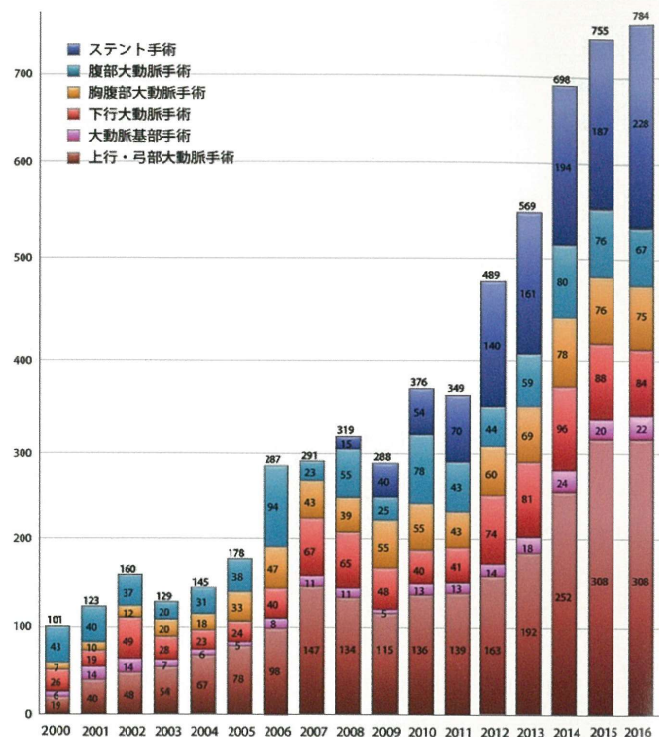
病院の基本構成要素は診療科です。病院は診療科の複合体と言えます。病院全体の実力を上げる方法はありません。各診療科が実力を伸ばすこと以外、病院の実績を伸ばす方法はありません。

どこの診療科も同じですが、最初は一人から始まります。はっきり言えば、その一人は医師でなければなりません。一人の医師がいて、その医師が何かビジョンを持っている。こういう医療をやりたいとか、こういう診療をやりたいとか……。

そのことを自分の周りにいるスタッフに語るわけです。そのビジョンを聞いて看護師は、自分の持っているビジョンに照らし合わせて自分なりの医療を考えていく。同じように臨床工学技士も理学療法士も検査技士も薬剤師も管理栄養士も、みんながそのビジョンに自分のビジョンを重ね合わせて自分なりの医療を思い浮かべる。こうして核になる医師を中心として一つの医療チーム（例えばKAC）が形作られていきます。

そういう訳で、各診療科の医師（特に部長）は、このチームの中心であるという自覚と責任を持たなくてはなりません。その診療科の行く末は、診療科部長の責任と考えてください。医師が頑張らなければ病院は良くならないのです。

“Top Gun”たるべき川崎幸病院の医師はエリートでなければなりません。医師だけでなく看護師を含めたコメディカル、そして事務職員も全てがその分野のエリートであって欲しいと思っています。



そして院長は……

石心会グループのFlag Ship（旗艦）である川崎幸病院は“Top Gun”となることが使命です。なぜ、“Top Gun”でなければならないのでしょうか。それは、当院で診療を受ける患者さんにとってそうであることが最良であり、かつ当院で働く職員にとってそれが最良だからと僕は確信しています。

川崎幸病院は地域の医療ニーズに応える病院として始まりました。そして今、地域の医療を支えつつも、新たな医療を展開する時期にきています。

その中であって院長とは、医者の中核としてビジョンを持つ医師を牽引し、そのビジョンを支えてくれる病院職員をまとめ、結果としてどんなactivityも受け入れられる病院組織“Top Gun”を作り上げる使命を持つと僕は考えています。この15年間に僕が川崎幸病院から受けた恩を、そのまま全職員に返したいと思っています。

本年（平成30年）1月より埼玉石心会病院の病院長を拝命賜りました。

当院は昨年11月にこれまで30年間慣れ親しんだ鵜ノ木の地から狭山市駅西口にほど近い土地へ新築移転いたしました。院内職員はもとより石心会関係者の皆様や地域の方々には大変ご協力いただき、大きな事故やトラブルもなく入院患者さんを含めた大移動をすることができましたことを改めて感謝いたします。

私は母校の順天堂大学の脳神経外科教室の関連施設であった所沢の防衛医科大学校脳神経外科に1992年に赴任となり12年間お世話になった後、2004年に埼玉医科大学に異動、2007年に開院した埼玉医科大学国際医療センターの開設準備ならびに脳卒中センター、脳血管内治療科の開設、運営に関わって参りました。

当院の新病院計画には、2014年頃よりご相談を受け、2016年3月に正式に入職させていただいております。この新病院開設に関わる中で、今回の当院の新病院には多くの意味と使命を感じるようになりました。

この地に産声を上げて約30年間、地域医療に取り組んできた当院では、様々な困難な時期を乗り越えここまで辿り着きましたが、ある意味で医療過疎である埼玉県の医療事情の中でさらなる活動を展開するには、病床数を増やし病院そのものを時代に合ったものに再構築する必要があると石井暎禧理事長が判断されたと聞いております。そして断らない医療、患者主体の医療の徹底。言葉にすると短いながらも重く難しいミッションです。

断らない医療

断らない医療を実践するには、

楽しく、美味しく、
そして激しく！

石原正一郎

埼玉石心会病院院長



ERをはじめとする患者さんを受け入れる部署の対応や病院としてのベッド運用にこれまで以上に対策が必要です。現在、救急専属医師4名を中心に、各科の協力を得ながら日々の救急の受け入れを展開しておりますが、残念ながら当院では川崎幸病院に比べまだまだ在院日数が長めで、日々救急患者さんを受け入れるためのベッドコントロールに追われています。

これに関しては、今後各部署と検討を重ねスムーズな受け入れを可能にする体制を確立いたします。また、入院中の患者さんの退院、転院を早める努力も必要となりますが、現在回復期リハビリ転院や療養型病床への転院に関しては、院内の40床の回復期リハ病床では全く足りず、多くは近隣病院に依存している状況です。

まずは、当院からの患者さんをより早く確実に転院させていただけるように近隣施設との連携強化を図ります。将来的には、当院の急性期医療を支える回復期病床、療養型病床を有する近隣の石心会施設が必要と考えています。

24時間、年間を通して断らない医療を実現するには、それに関わるスタッフの心と体の健康が大切です。職員が疲弊して暗い顔をしていたのでは病んでいる人は治りません。そのために今回の新病院計画では、石井理事長が目指される断らない医療を実践する職員のために様々な配慮や工夫をさせていただきました。特に職員の食事に関しては、景観の良い場所でできたての美味しい食事ができるよう心を配りました。